

近世・近代の白川道

－発掘成果・江戸時代絵図・近代測量図－

千葉 豊

京都大学文学研究科附属文化遺産学・人文知連携センター

はじめに－白川道・志賀越・山中越－

「京都から近江国志賀郡へ通じる道。山中越ともいう。荒神口で鴨川を渡河し、北白川までは京都大学の敷地で道は消滅したが、北白川からほぼ東北行して東山山中に入り、白川に沿ってその分水嶺を経て近江国志賀郡（大津市）に至る。」(国史大辞典における「志賀越」の説明)

I. 発掘調査の成果

(1)2000 年度調査地点

発見した近世白川道の特徴

- ①中世の白川道と併行し北東－南西方向。中世白川道の南辺を切り通して北側に崖面造成。
- ②路盤は小礫をまじえた砂質土で構築される。無数の轍跡が認められる。轍跡は2筋に集中、轍間の幅は1.8m前後。廃絶直前の路盤には轍の跡なし。轍の最大幅 70cm、深さ 40cm。轍を補修し路盤の整備を繰り返した結果、廃絶時の路面は当初の路面より、1.2～1.5m前後かさ上げされた。
- ③道路幅 5～6 m前後。
- ④南側に接するように水路あり。
- ⑤存続時期 出土遺物（路盤・轍・水路）から、18 世紀前葉～19 世紀中葉。路面上部を尾張藩邸設置時の整地土が覆う。

(2)1978・81・87 年度調査地点

発見した近世白川道の特徴

- ①東北東から西南西に伸びる。南へ下る傾斜地を切り通し、北側に崖面を造成。
- ②5 枚前後の路面を確認できる。路盤は小礫をまじえた砂質土で構築。
- ③轍は3筋に集中する傾向（中央は往還兼用？）がある。轍の最大幅は約 40cm、深さ 40cm。轍間の幅は1.2m前後（1978 年度調査地点）。
- ④道路幅 約 3.5～4.5m。
- ⑤南側の道沿いに野壺が集中して並び、その南側を水路がはしる。
- ⑥存続時期 出土遺物（路盤・轍・水路）の年代から、18 世紀後半～明治時代。

II. 「山城國吉田村古図」にみる白川道（「古図」の写真は特別展リーフレット 9 頁に掲載）

- ①田畑を一筆ごとに記し、道路や水路、笹原などを彩色して描いた村絵図。
- ②制作年代 18 世紀後葉～19 世紀前葉と推定
- ③北東から南西へ、吉田村を斜めに二分してはしる道が白川道
- ④白川道と水路の関係が発掘調査と符合する→絵図はかなり正確に描かれている。

III. 白川道の寸断

(1)幕末における尾張藩邸（1863－1870）の設置

①文久3年（1863）、吉田村より土地を購入して藩邸建設に着手。

敷地は現在の京都大学本部構内西半。白川道を間に挟む東西 280m 前後、南北 350m 前後の土地。

②四周に堀を巡らし、長屋のほかに主殿や泉水、水路などを設ける。京都における尾張藩の拠点施設。

③藩邸の設置によって、この部分の白川道は消失した。

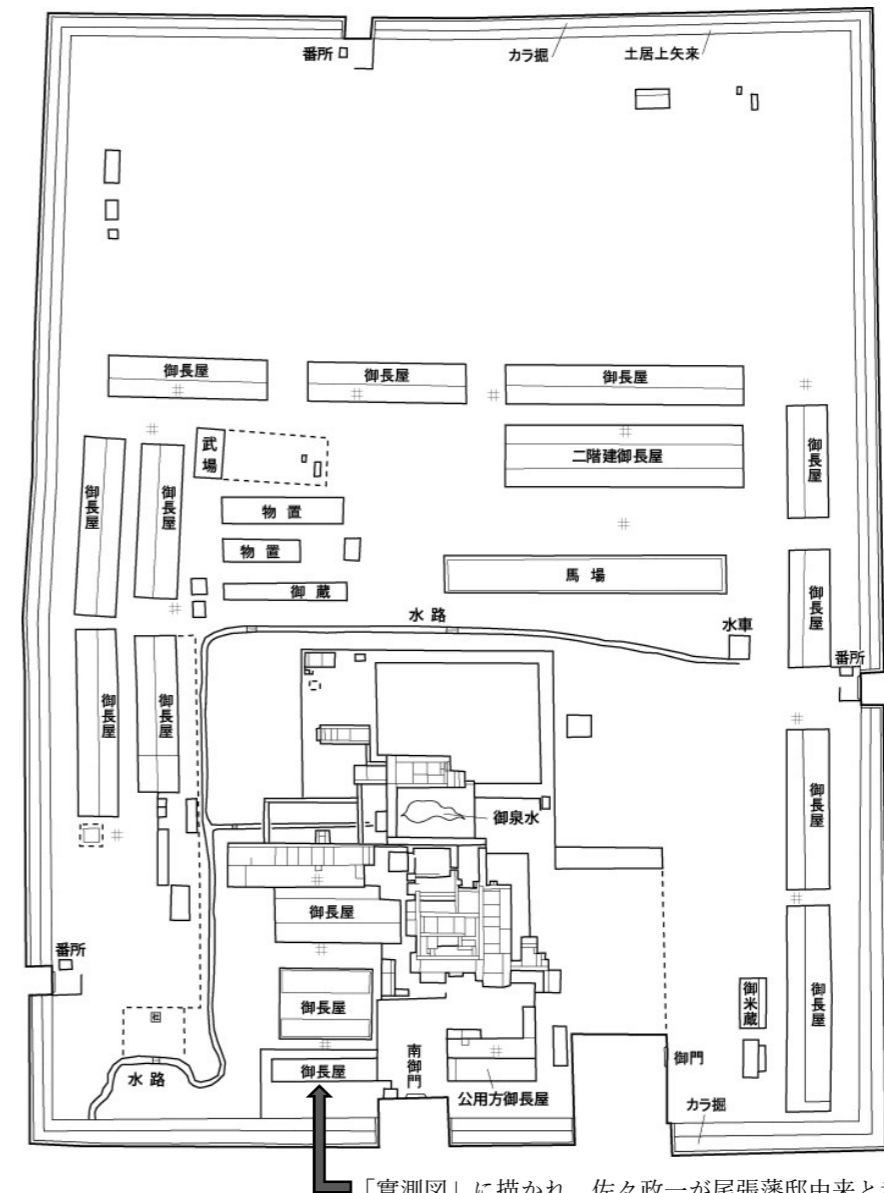
→吉田村内の白川道は村の管理下にあった？ 迂回路は存在したか？

(2)「山城國愛宕郡吉田村地内第三高等中学校豫定敷地實測図」（大学文書館蔵、特別展リーフレット 7 頁に写真掲載）にみる明治時代の京都大学本部構内

①明治 20 年（1887）、第三高等中学校が大阪より京都へ移転する際に制作された測量図

②東半では白川道が見えるが、尾張藩邸のあった箇所（西半）では、白川道が失われ水路のみ残存。

③国文学者で俳人でもあった佐々政一が尾張藩邸に由来すると考えた建物が「實測図」にも描かれている。



「實測図」に描かれ、佐々政一が尾張藩邸由来と考えた建物にあたるか？

尾張藩邸

（「吉田御屋敷惣図」名古屋市蓬左文庫蔵より作図、一部改変）

文化財発掘Ⅷ「埋もれた古道を探る」関連講演会

近世・近代の白川道

— 発掘成果・江戸時代絵図・近代測量図 —

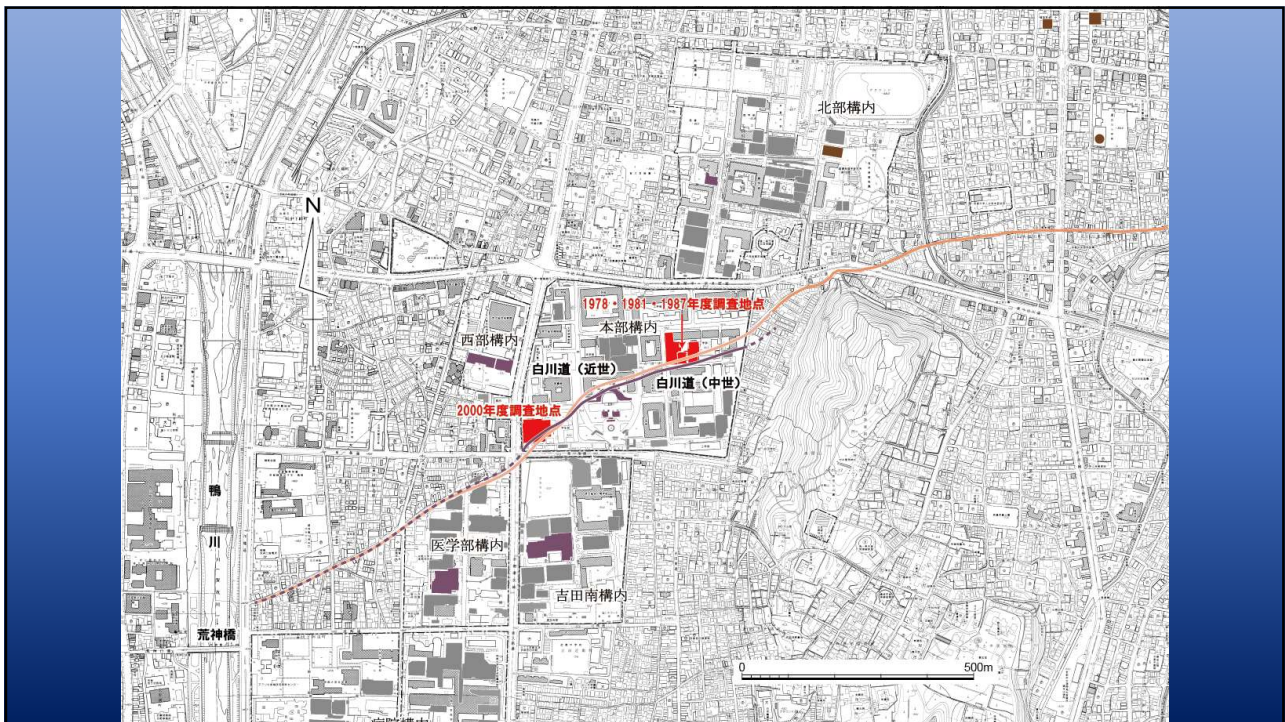


千葉 豊

文学研究科附属文化遺産学・人文知連携センター
Center for Studies of Cultural Heritage and Inter Humanities
京大文化遺産調査活用部門
Section of Archaeological Heritage Management for KU



白川道：京の荒神口と近江を結ぶ交通路。「志賀山越」・「志賀越」・「山中越」



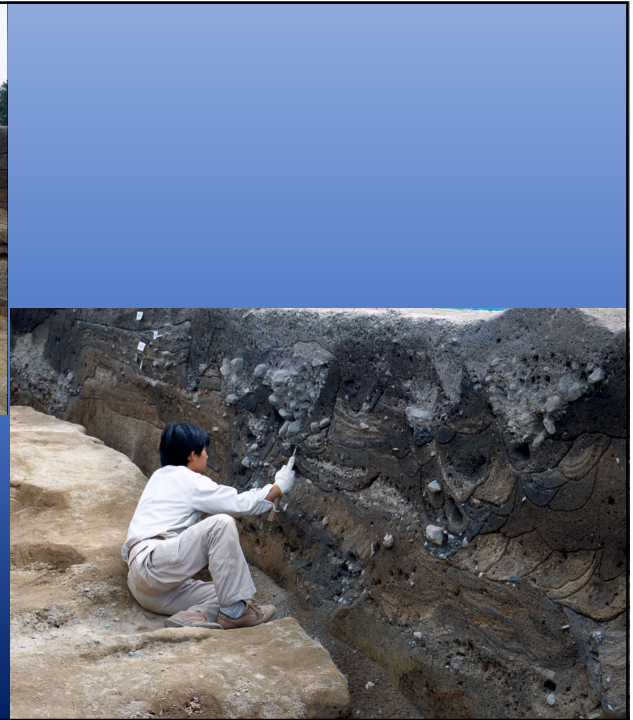
I - 1. 発掘成果：2000年度調査地点





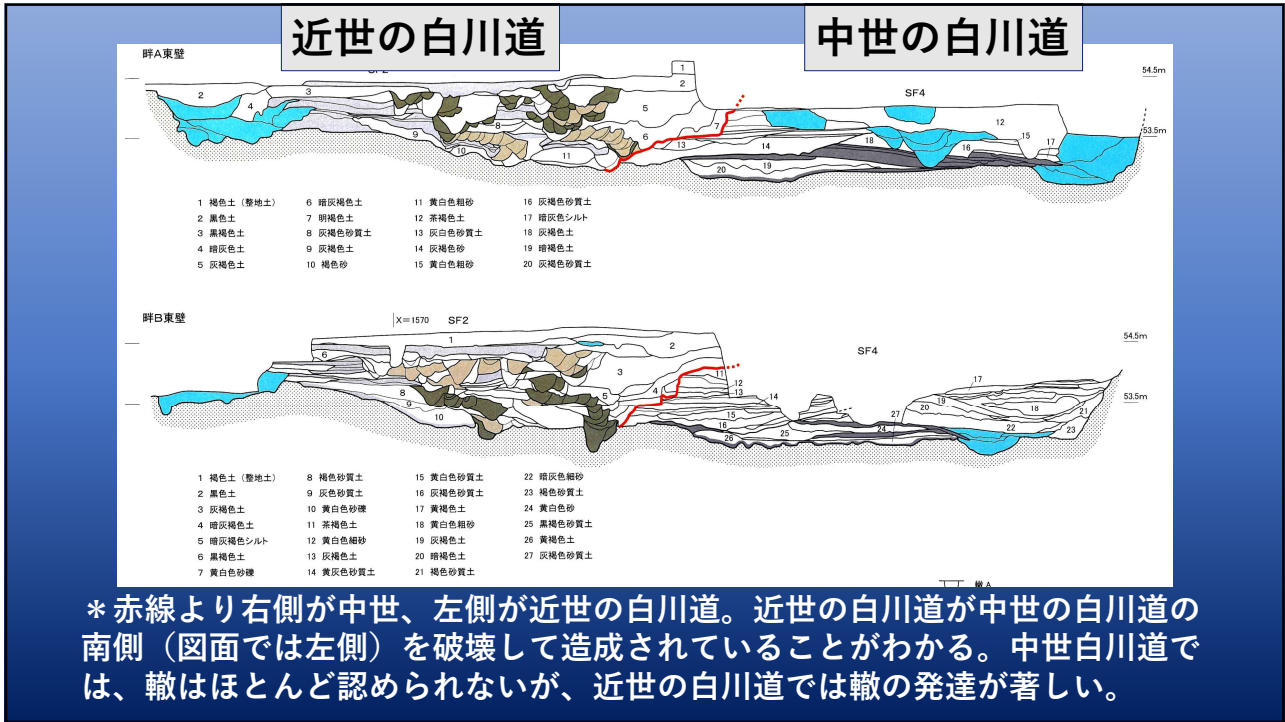


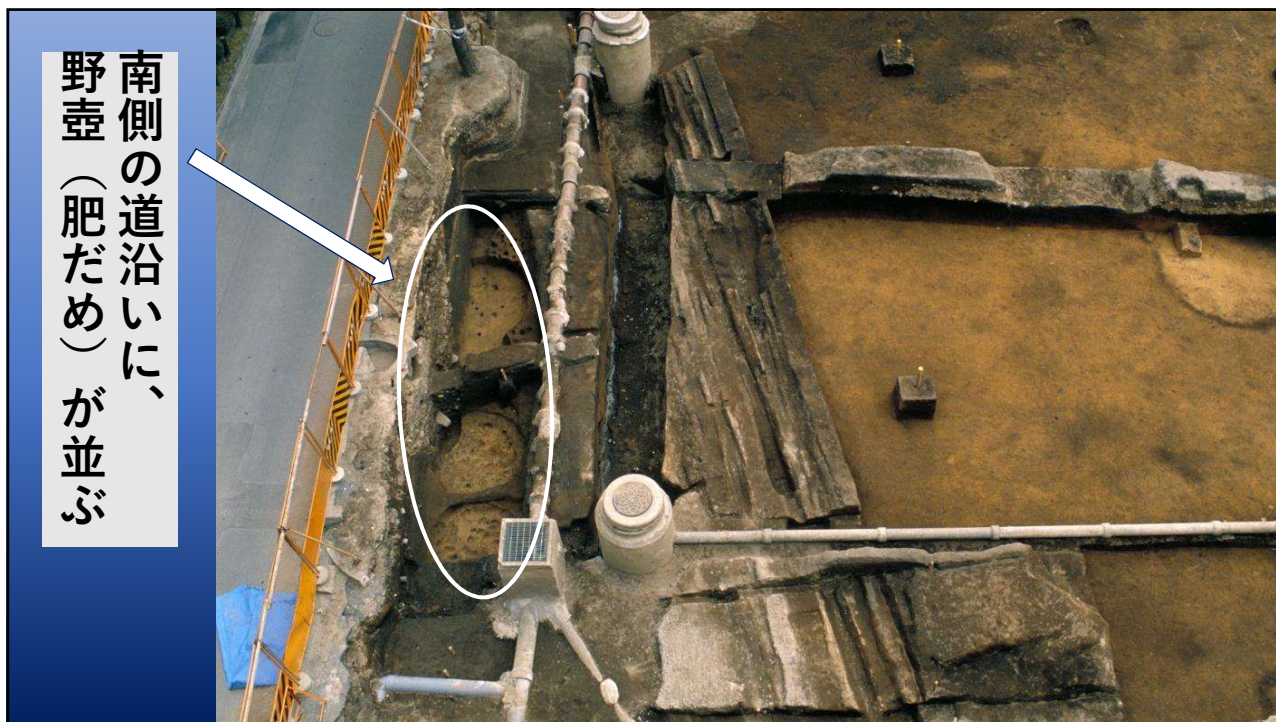
白川道の断面状況。轍跡が複雑に切り合っている状況を理解できる。



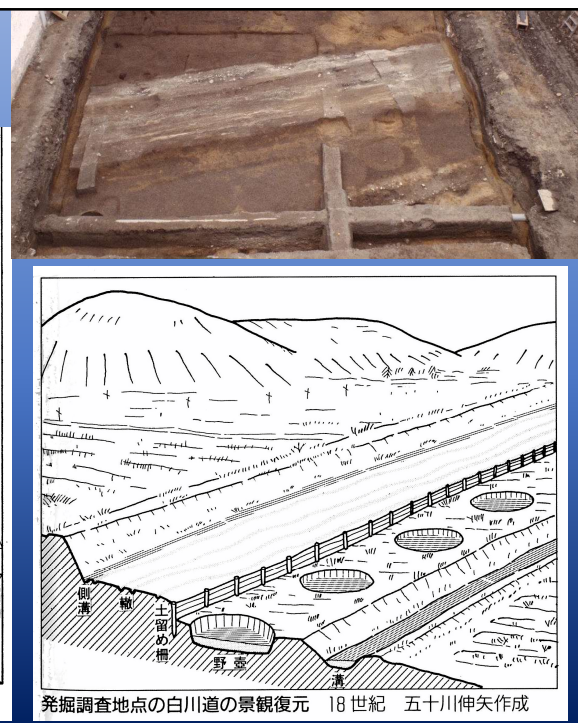
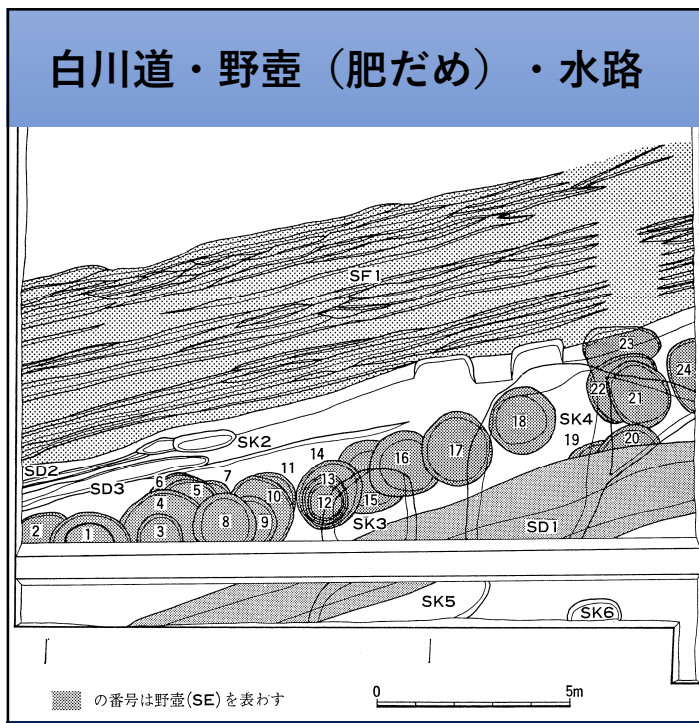
中世白川道を近世白川道を切っている状況。







南側の道沿いに、
野壺（肥だめ）が並ぶ




	轍の筋	対になる轍間の幅
2000年度調査地点	2筋に集中	1.8m前後
1978年度調査地点	3筋に集中	1.2m前後

↓


様相が異なる。その理由は？

牛車用敷石（車石）の軌間幅

久保孝「総合的に判断して、(中略) 135～140センチぐらい」
 大津市歴史博物館『車石』企画展図録、
 2012年



車石広場（市内山科区北花山）

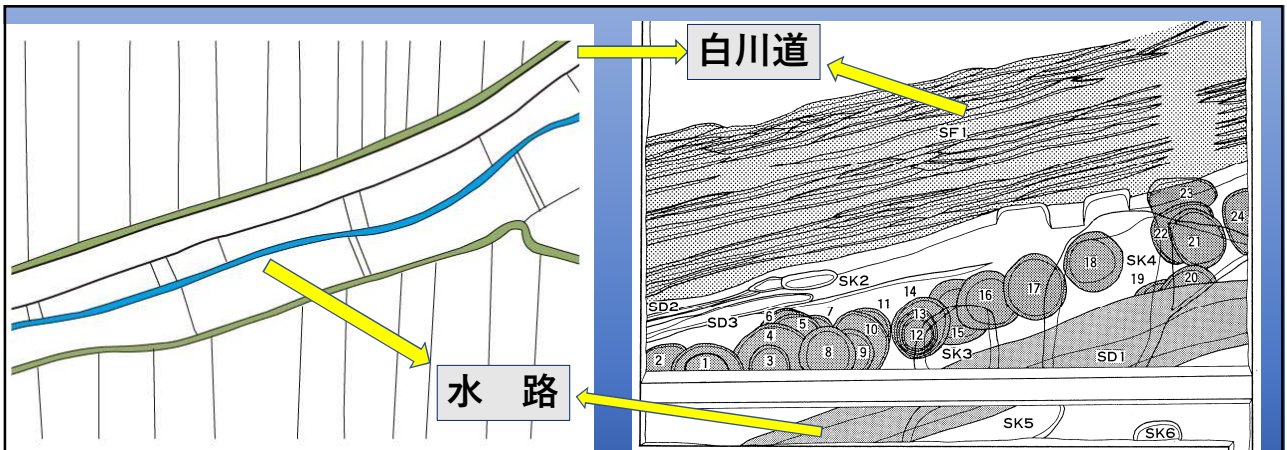
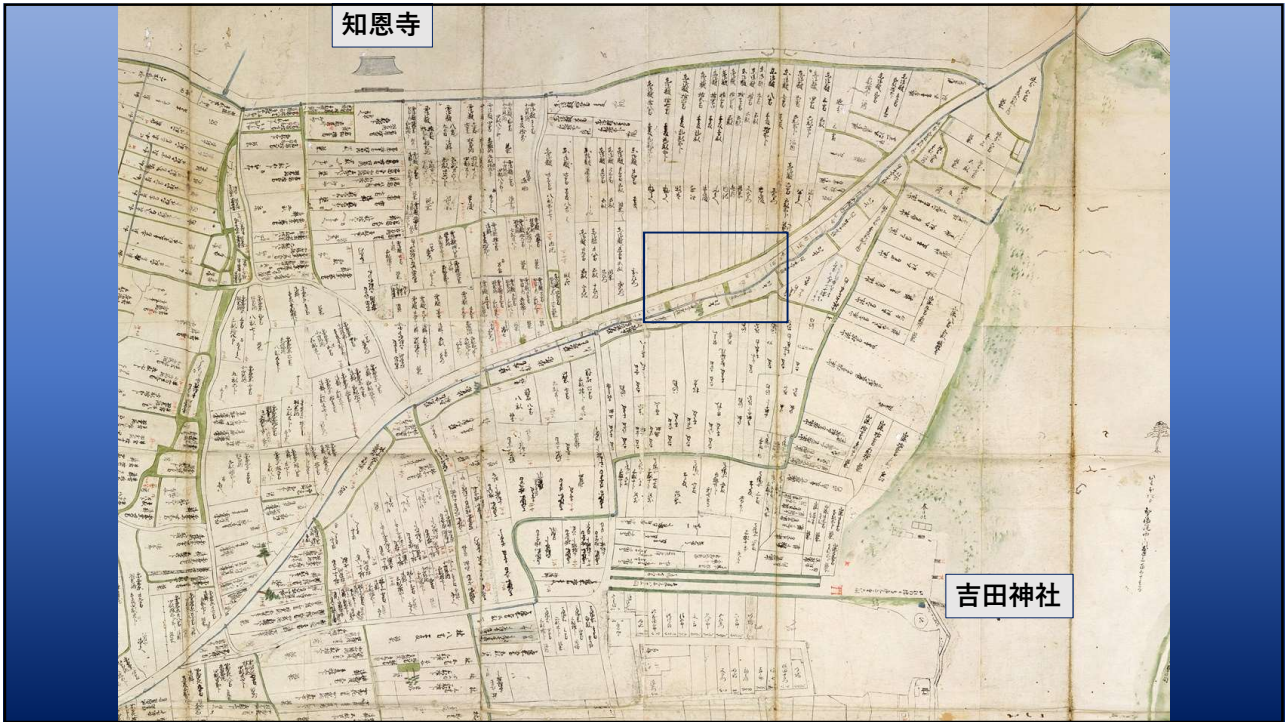


150cm

Ⅱ. 「山城國吉田村古図」にみる白川道



総合博物館蔵：18世紀後葉～19世紀初頭頃成立



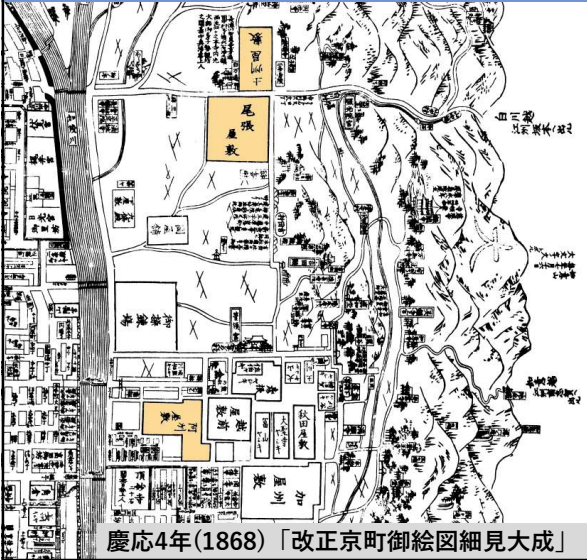
白川道と水路 (『吉田村古図』トレース図)

白川道と野壺・水路 (発掘での検出状況)

このあたりでは、白川道と水路が離れて伸びている。これは、発掘調査でも確かめられ、この間には野壺(肥だめ)が並んでいることが明らかになった。

Ⅲ. 白川道の寸断

(1) 幕末における尾張藩邸の設置



- ・ 文久3年（1863）土地購入、藩邸建設
- ・ 明治3年（1870）接收される

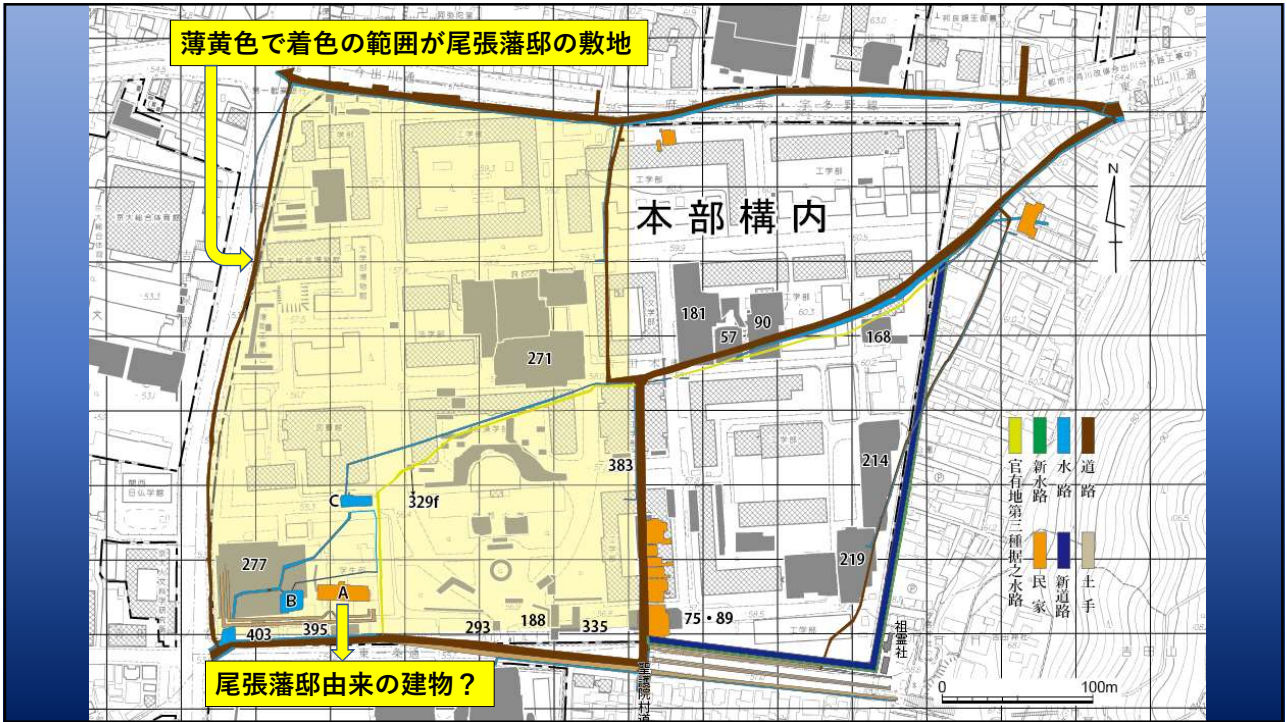
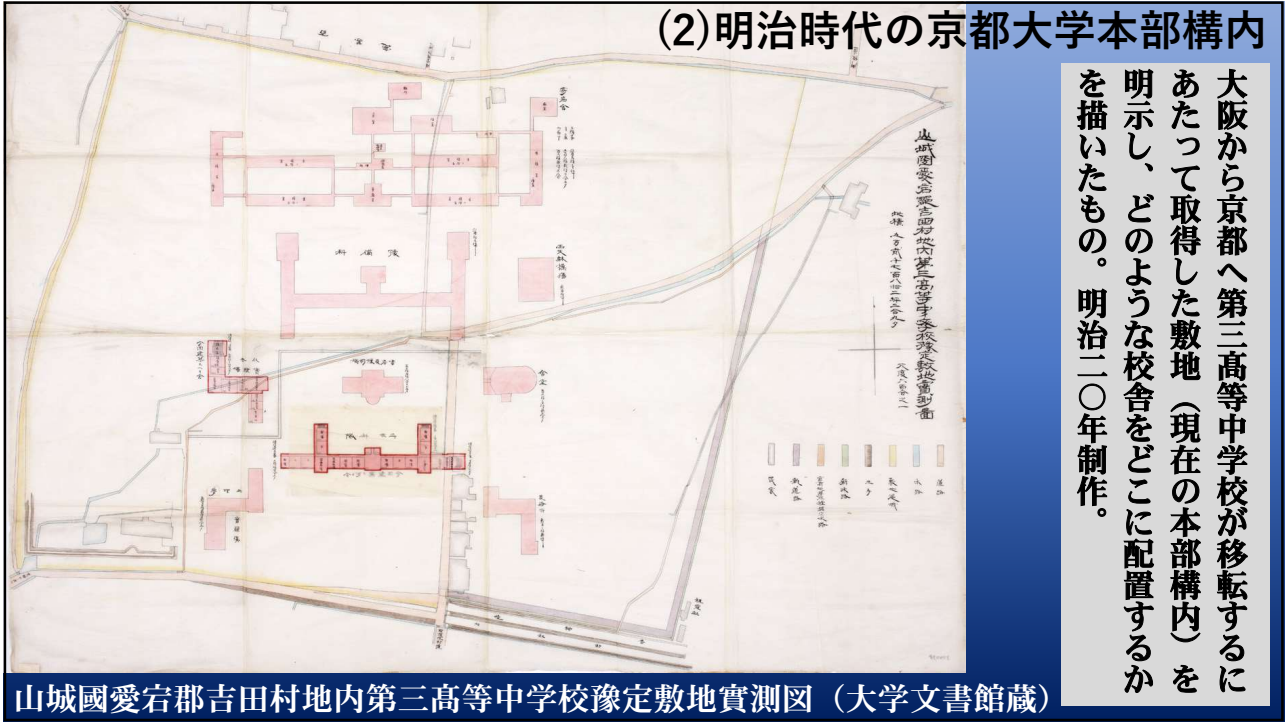


■敷地は現在の京都大学本部構内西半。白川道を間に挟む東西280m前後、南北350m前後の土地。

■四周に堀を巡らし、長屋のほかに主殿や泉水、水路などを設ける。京都における尾張藩の拠点施設。

■藩邸の設置によって、この部分の白川道は消失した。

→ 吉田村内の白川道は村の管理下にあった？ 迂回路は存在したか？



**醒雪（佐々政一：1872-1917）「過去之吉田村」
壬辰会雑誌第6号（1892年）**

維新前は、村内に尾藩の留守屋敷あり。そが西端は、今の学校の界と同じけれど、東は今の吉田町を一直線に、化学教場の中央を通して、北方百万遍に出づる道ありしが、是が堺なりしとぞ。我物覚ゆる程の年にいたりし頃は、はや尽く取壊ちて、
今の校の西南の隅に唯茅屋一軒のみ立てり。

■1872（明治5）年生まれの佐々が「我が物覚ゆる程の年にいたりし頃は」と記しているので、1887（明治20）年制作の「實測図」よりも10年ほど前の1877年（明治10）頃の状況を記述しているとみられる。

本日の話のまとめ

- ・ **江戸時代の白川道** 発掘で検出した幾重にも重なる轍の跡は、京と近江を結ぶ物流の動脈として重要な意義をもっていたことを実感させる。道周辺の状況は、発掘成果と『吉田村古図』の描き方と一致している。
- ・ **幕末の白川道** 尾張藩邸の設置で一部（現・本部構内西半）が寸断される。白川道の街道としての意義が低下していたか？
- ・ **明治時代の白川道** 学校建設により、現・本部構内の東半も消失する。